

タイトル	言語をさすらう越境者の雫：中国内モンゴルの現代詩集『天の風』を中心に
著者	テレングト，艾特
引用	北海学園大学人文論集，16：A31-A46
発行日	2000-07-31

# 言語をさすらう越境者の雫

——中国内モンゴルの現代詩集『天の風』<sup>(1)</sup>を中心に——

テレングト・艾特<sup>アイトル</sup>

一

地図で探せば

古里は一滴の涙

泣かないで

と母から手紙がくる

それを読みながら

私は泣く

涸れることのないその涙は

ノスタルジアを

温かく潤してくれる

古里は地図の上から

涙の目で私をみつめている

永遠の青空を大きくするため

私は古里を離れている

これは『産経新聞』朝刊一面のコラム「朝の詩」(一九九六年三月二九日)に掲載された中国内モンゴルの詩人B・ボヤンヒシグ氏の「古里」という日本語の処女作である。本格的に日本語を習いはじめてからやっと四年目になったときの試みであった。

この詩において伝統と現代、古里と異境、望郷と流離、そして永遠の「故郷」に回帰するため「古里」を遠ざけるといふような対立した二つの要素が色濃く描かれているが、その二者間の臨界に立たされた作者の情感は母語ではない日本語によって

語ることが可能であつて、いや、むしろ母語ではないこそその言葉に張り巡らされた緊張が一層高められたとも感じられる。しかしモンゴルというと、すぐさまいわゆる青空、星空、大地、風、草原……というような自然とノスタルジアを想起させるステレオタイプの素朴な郷愁などがイメージされるが、その類のイメージはここにはまず見られない。

B・ボヤンヒシグ<sup>(2)</sup>、中国内モンゴル出身。普段寡黙でかつ非社交的な性質のせいなのか、今まで遊牧暮らしを続けてきたかのように、文学の分野においてもいかなる公的同人グループ・詩人サロン・団体に属さなかつた。それでも詩壇を引き付けるなにかをもっていた。早く一九九〇年からその詩の現代性が注目を浴びはじめ、その探索と着想の初期、すでに伝統的詩に反旗を翻したと批評され、内モンゴルのモンゴル詩壇で物議を醸し出した。内モンゴル現代詩として中国と台湾の現代詩の分野でも翻訳、批評され、そして今度その感性を生かし、日本語を媒体にして、つい詩文集『懐情の原型——ナラン(日本)への置き手紙』(英治出版、二〇〇〇年四月十日)を上梓した。

台湾の詩人、画家、評論家席慕蓉氏は、ボヤンヒシグの詩の現代性につき「モンゴルの歴史的災難と現代との融合が詩の力となり矢と弓のようで、そこに矛盾と衝突があり、また不安、

緊張もある<sup>(3)</sup>」と批評し、中国の批評家王紅彬氏は「これらの詩は明らかに一般的な意味における少数民族の詩歌とは甚だかけ離れ、また一般の意味における新しい詩でもない。この詩は見事に現代の技巧と心理を融合させている。チャレンジはここで決して冒険の意味がなく、価値ある生の表出であろう<sup>(4)</sup>」と評価している。

そして今度日本の熱烈な読者に支えられ出版された詩文集『懐情の原型——ナラン(日本)への置き手紙』は、『朝日新聞』(都内版)、『読売新聞』(都内版)、『毎日新聞』(全国版)に紹介され、文芸雑誌『文学界』にも批評された。作家の宮崎学氏は「今の日本人より日本人らしい懐かしい感性の持ち主<sup>(5)</sup>」と、現代詩作家の荒川洋治氏には「初々しくてさわやかで純正な日本語<sup>(6)</sup>」と評され、そのエッセーの部分が読者らに「技巧に走らず、心にまっすぐ入ってくる文章。日本語もまだまだ捨てたもんじやないと教えられた」、また「日本語ってこんなに美しい言葉なんだと気付かされた。多くの人に読んでほしくなった<sup>(7)</sup>」とも称えられるほどである。

確かにボヤンヒシグ氏の諸作品は、伝統から現代、中国から日本、モンゴル語から日本語というような一連の遊牧的な越境する行為を繰り返してきたと言える。そしてその根底には、一

貫して現代詩の宿命的な性格——創造的、探索的なスリル、冒険による危険性、意外性と豊饒性などがあることも間違いない。したがってもし思想史における越境にして遊牧主義は現代において一種の欠かすことが出来ないストラテジーだとすれば、想像的言語のなか、ポヤンヒシグ氏はまさにそれを伝統と現代、自己と他者、古里と異境、母語と外国語などの間に実践し、その遊牧的な性格をもつ詩の冒険の旅において、臨界の言語を生きているのだと言えよう。

## 二

現代詩を読むにしても批評するにしても、恐らくわたし達誰もが伝統を意識し（あるいはとくに意識しなくても）、伝統の慣習の射程距離から離れられないのが確かである。勿論すべての読者は何百ないし千年の詩の歴史を意識して、現代詩に照らして読んでいくわけではないが、しかし実際、詩人たちに対しての読者の眼差しは、想像以上に厳しいと言つてよい。したがって真の詩人は、常に詩の歴史・伝統と読者との両側からの厳しい「監督」・「検閲」のもとで自分を表現しようと、言語との熾烈な戦いを繰り返しながら創造していると言え、いわば言語と

の葛藤そのものであると言えよう。そこで、詩人たちにいつも伴っているもののなか、伝統から離れすぎてはいけなく、伝統を踏襲してもいけないという、板挟みの苦しさがあるに違いない。実際、その苦心の果実——詩こそ、読者の限りのない文化的な贅沢な心の欲求をわずかながら満足してくれるのである。

このような詩の作り手と読み手との関係が、現代における現代詩の一つの有り様だとすることができれば、この苦心の果実とされる詩は、一体どういうものであろうか。ここで読者に呈するポヤンヒシグ氏の詩集『天の風』は、まさにそのような苦心したあげく、その果実がモンゴル現代詩の一つの新しい有り様を予兆したものだとも言える。勿論、それはまず前提としては今まで内モンゴルの誰もがよく馴染んだ、かつ狭く限られた範囲に閉じこめられていた、次の詩に対する考え方が、あらゆる文学への、最も妥当な基準、評価の目印なのだということを、修正ないし放棄しなければならない。すなわち、詩は必ずや現実そのものを反映し、現実そのものに服従し、奉仕するという見方、いわゆる詩は人間の現実生活を言語の芸術をもって最も正確に表現しており、最も多くの人々の実生活に役立ち、享受するようすべきであり、現実生活を指標にしてはかるべきだ

という類云々の文学に纏わる諸々の見方を放棄しなければなら  
ない。

実際、現代文学という文学の現代性が問われるようになってから、詩の発展はますます多様化を求めており、一律的、単一的、唯一的な詩の創作と評価の仕方は、イデオロギーの統一下の文学においてすら、限界を感じ、詩自体が形式から内実までとどまることなくいままでの伝統に反目し、伝統から離れ肥大化されているのである。現代詩は、あるとあらゆる方法を使って、伝統への踏襲を避け、正当だといわれているあらゆるものへ挑戦し、それを歪曲し、侵略して、差異をもつてずらし、常に革新の道を開こうとアヴァンギャルドをしていると見ることが出来る。しかも時には、その努力が伝統の力と、正比例となつて行われ、恰もそれはもう一つの伝統を構築しているかのようにも見える。事実、現代詩は確かに新たにもう一つの伝統をすでに形成しつつあると言えよう。ひよつとすると、場合によってこれこそ日常生活の模倣、延長ではなく、真の詩の新しい「伝統」だとみるべき景観でさえ現われている。言うまでもなくわたし達読者、批評界、研究界ないし詩人たち自分自身にも多くの理解不可能なことが今の時代の詩においても山積しているの  
で、現代と伝統の境目を見極める確実なすべは何も手にしてい

ないと言っている。

ところが、愉悦すべきことに、この現代詩という新しい「伝統」には、オリエントの中でもマイナーな言語であるモンゴル語が媒体とされ、参与して怠っていない。つまりボヤンヒシグの詩である。そしてここで取り上げるボヤンヒシグ氏の詩集『天の風』も、以上のような詩の新しい「伝統」に参与した数々の結晶であり、革新を求める新しい詩のイメージの諸々の閃きである。詩集『天の風』の中、恐らくわたし達読者がぶつかるのは、実生活の反映、模倣、描写のことではない。そこで知覚されるのがまず膨大、かつ深奥な言語の問題であり、非日常的で、かつ読み手の解釈を拒否するような新しい詩のイメージの世界であろう。その詩の世界では時間と空間が再編成され、世間と生と芸術の意味が新たに再構築されているように感得される。ある意味ではここでの詩のリズム、拍子、語り方と視点が、わたし達が今まで持っているだろう馴染みの詩のイメージとは違って(とくにモンゴルの伝統詩のイメージと違って)おり、今までのモンゴルの世界を真新しく捉え、生活一般から、生死までの諸々のことが新たに観察され、イメージ化されているのである。

三

『天の風』には、しばしば新たに現代的な神話さえ創り始まったようなことが気付かされる。そこで人間がときとして天地創造の原点におかれて眺められ、天地がときとして人間化され、イメージ化される。視点と思考、語りの立場と語られる対象が、倒錯、反転、転倒され、わたし達読者の慣れてきた言葉と思考が、つねに緊張と危機にさらされ、言葉のスリルと探検を味わされる。以下そのいくつかの詩を取り上げて見る。<sup>9</sup>

例えば、『天の風』<sup>10</sup>（以下とくに指示のない限りすべて『天の風』による）という詩は、古今東西問わず詠われてきた生の始原のモチーフに触れているが、ここではモンゴルの独特な世界観が表現され、モンゴル語の微妙かつ巧みな語尾変化によって、見る目と見られる目、天と生が一体化され、かつ永遠が主体化され、時間と空間が全く別の次元で構築されているのである。それと同じ叙法で、自然と生のイメージを呈示してくれたのが「雨が降る」であろう。ここでは日常的立ち振る舞いがアレンジされ、「雨」という自然のものが自分と交え、生気をもたらす雨が自分化している。自然の恵みで生を謳歌しているか、生が自然そのものであるかは見分けがたい。「私の石」では、自然崇

拝の主体と自然の魂が主客混同の手法で描写され、いずれもモンゴルのな世界のイメージを呈しながら、その形式から叙法まで斬新な形を取っている。いわゆる伝統的な詩の慣例にとつては、これは破壊的、挑戦的な出来事だと言えよう。

このような伝統に対する差異と、斬新さは、氏の詩で登場した時空のイメージからも伺える。彼の「奇怪なこと」、「虎の都」、「昔の雨」などは、実際の測られる時空を越え、過去が未来として語られ、未来が過去として描写され、過去、現在、未来が同次元で顕現されている。主観的な対象が客観的なものとして変貌し、客観的な対象が主体として生まれ変わる。ここで登場した空間が分離しがたい領域になり、時間も順序よく刻印できる単位としてみてはいけなない。特定の場所と時間が意味を失い、それをはかる基準がすべて孤立したイメージの中に委ねられている。ここでは、詩のイメージが常識から離れて再構築され、現実に全く考えられない時空の世界が構造化されてくる。今日、科学という本来道具とされていたものが唯一の崇拜の信仰とされ、全てが合理化され、あらゆる物事が合理的な解釈されている現代においては、これらの詩はあたかも人間の心だけが合理化されない、最後の極地だということを宣言しているかのように見える。

文学におけるモダニズムとポストモダニズムの拮抗の問題にまつわる言語は、氏の詩においてもとくに重要視されている。氏の詩では、言葉それ自体がときに表現対象・内容よりも重みを持ち、細心の工夫が払われ、形式の探求の代価として、文法の諸法則、韻をふむ作詩法さえ無視され、破壊されている。例えば、「動詞」、「五本の指」、「遠離」、「恋の文法」、「狼」、「算数」などでは、言葉そのものと、その形式が異常に重視され、表現そのものが表現の対象になり、言葉が詩の表現の目的として工夫されている。その技巧を施したところにマニエリスム的な凝らしさが見られる。表現における、伝統的な詩への離反、差異は、まさにこれらの詩において濃厚に現れており、ポストモダンの詩の仲間入りだと言っても過言ではない。「動詞」、「遠離」、「恋の文法」という諸詩ではいささか滑稽な、言葉遊びの傾向が見られなくもないが、モンゴル語とその文学の伝統において見れば、まったく斬新なイメージを醸し出したことには、疑い余地がない。ここでは、品詞が人格化され、言葉の文法学的、修辭学的な定義が、詩のイメージとしてアレンジされている。例えば「算数」では、自然天体などが算数の記号として異化され、詩の素材として扱われている。「五本の指」、「狼」では、わたし達読者が持っているだろう固定化された「指」と「狼」につい

てイメージが、全く別の視点から観察され、不可能が可能として叙述され、想像もつかない新しいイメージが甦られている。そこで言葉によって新しい意味が与えられているか、それとも新たな詩の世界がイメージされているのか、もしくはイメージの世界の本来の姿がそうであるべきなのか、全て読者わたしたちの各々の主観的な判断によるしかない。これらの詩はわたし達読者の高度な想像力と、解読力が要求され、言葉への細心の注意が求められる。したがってこれを安易に単なる言葉の遊びとしてみなすならば、逆にわたし達読者の愚かさや浅薄さが照らし出されてしまう嫌いがなくもない。勿論氏の詩には、言葉遊びとして受け止められるものはあるが、しかしそれがどんなに未熟な面があつたとしても、人間の本能における遊戯衝動が芸術と絶別できると言い切れない限り、その言葉の情動的な遊戯を見過ごしてはいけぬ重要な意味があるであろう。

このように、氏の詩集『天の風』は、言葉の問題が、作者と言葉との葛藤として顕著に現れ、その詩のイメージが新しい世界を呈示している。もちろんそれはすでに世に著した氏の詩集『片方の月』(一九九〇年十一月)と同様、必ずや不理解者たちに非難されるに違いない。しかしにもかかわらず、氏のこの詩集は、これまでと同じように、モンゴル語文化圏の詩界におい

て、現代的な意味を獲得し、かつ先駆的な役割を果たすのが間違いない。氏の詩では、日常言語にしても、詩的言葉にしても、いずれもここで再吟味され、再構築され、再び意味づけられている。したがってその新しい言葉の再配分・再指示によって、詩が全く別のイメージの世界を描き出し、構築しているのである。氏の世界では、言葉と詩があたかも表現と思考の自由と、固定された束縛からの自由として変貌し、ときには詩それ自体が自律的に動き出したかのようにも見える。わたし達はこういったボヤンヒシグ氏の諸々の詩において、現代詩がモンゴル語で表現された詩の世界でも一つの確固たる実りある収穫を獲得した事実を確認できよう。

#### 四

一方、ボヤンヒシグ氏の詩は、斬新さと危険性と意外性などによって、伝統的な詩に対し背離、否定、破壊を意味するアバンギャルドだと言えるが、それと同時にそれ自身もすでに詩の革新の伝統の作り手となっており、詩の本質への模索そのものでもある。したがってボヤンヒシグの詩は、模倣ないしリアリズムに縁遠く、現実と社会をも故意に避けて指示していない。

そして一見まるで伝統の正反対の情動のようにも見えるが、しかし、まさにそこが、またその意味において、かえってモンゴルの伝統詩の原点とする「ジャンガル」などの叙事詩の伝統の延長線に位置づけられ、別の形でその伝統を受け継ぎ、真のモンゴル詩の伝統に収斂された面影が看取されなくもない。というのは、「ジャンガル」<sup>(1)</sup>などの英雄叙事詩は、古代ギリシアの叙事詩と同じように、その誕生と発展の軌跡からみて、これらの詩から決して現実社会を指示するような目的・意図が読み取れないからである。そこには日常的・世俗的な意味における楽しみが少なく、もし逆にあるとすれば、まさに作品・語り手・聞き手との宗教めく共同作業による崇高への憧憬が成就されるであろう神がかりのような儀式があると言えよう。そしてその英雄叙事詩の最高の目的があるとすれば、それは人間の美学的、詩的な歓喜と陶酔を求め、宗教めいた信仰があり、現実離れの歓喜と陶酔を聖とする純粹たる敬虔な憧れであろう。詩は詩として享受され、人間の諸々の心情が日常以上に高められ、より美的なものが感受される。詩は社会、政治と現実を媚びることはないし、日常的な煩惱の表出のためのものでもない。それはまさにモンゴル詩の伝統の真髓であり、醍醐味であろう。言い換えればそれがいわゆる人間の最も純然たる「贅沢な心」の欲



求に基づいて生まれた信仰めく言葉そのものだと言えよう。言うまでもなく、文学、詩は多様な存在ではあるが、しかし古代ギリシア英雄叙事詩の根本的な性格とされる<sup>12)</sup>ところがモンゴルの英雄叙事詩の求める境地、あるいは大自然に、靈的なものに陶酔することを聖とする伝統とは時代と場所を異にして、えも言えず一致していることがここで改めて言う必要がないであろう。

もちろんここでボヤンヒシグの詩が、全く伝統的なモンゴル詩の現代版なのとは言っていない。氏の詩はフランスのシュルレアリスムの影響もなくはないし、また世界現代詩による影響の痕跡が見られなくもない。しかし、幸いにその詩が、詩と現実、言葉と現実、作者と読者、そして言葉の神秘に対する傾倒などのような根本的、本質的な諸傾向において、上述のモンゴル詩の伝統、とりわけ英雄叙事詩や言霊信仰の伝統などから断絶的にかき離れているとは思えない。むしろその発展的な継続だとみるべきであろう。したがって、今や氏の詩を、内モンゴル<sup>13)</sup>のたった三十〜五十年の伝統をもって、限られた地域内において近眼的、浅はかな批評をすることは控えてもらいたい。むしろ、モンゴル詩も多くの異文化の諸要素を吸収しなければならぬ。またリアリズム、社会文学、政治文学などの諸要素

を受け入れるべくに違いない。しかし、真のモンゴル文学の伝統の延長線に位置付けられる現代文学・現代詩を見定めなければならぬであろう。というのは、人が精神的な存在であることを認めた以上、また詩がその精神的な存在の表出である以上、そして最も重要であるが、わたし達はモンゴル詩の伝統からその精神の靈的な木魂を感じ取った以上、わたし達は、真のモンゴルの伝統と、その後継ぎの現代詩を意識し、尊重し、より爛熟へ成長することを暖かく見守らなければならないからであろう。したがって自然によって授けられたお告げ・モンゴル伝統詩の原形への回帰を現代的な新たな探索・模索を裁断して切断する権利は誰もが持っていないであろう。

## 五

このたびボヤンヒシグ氏はわたし達読者のために、この現代風の詩集を用意したが、これは氏の日本留学中、多忙な毎日の中で、過去の自作をまとめて、改めて吟味し、整理したものである。異国において故郷を偲び、詩の探索をするというその行為は、第二次世界大戦前、モンゴル現代文学の基礎を定め、かつ現代詩の先駆者であるサイチョンガ<sup>13)</sup>(当て字：賽春戈)へ19

14（1973）（別名ナ・サインチョクト、当て字・納・賽音朝克凶）氏はすでに、実践して先例を立てたのである。その後継ぎとしてボヤンヒシグ氏は偶然にも五十年後れ、同じ異国で故郷を偲び、詩の世界で探検している。異国での孤独、故郷への憧れ、来るべき未来への憂慮などが、同じ詩的衝動と、同じ情動の果実をもたらすであろうが、冒頭に掲載した『産経新聞』コラム、「朝の詩」における「古里」がすでに証左になったように、手法と視点の斬新さ、イメージの新奇さで、それは紛れもなく前代のサイチンガとは違って、濃厚な現代的な意味あいがかき込まれているであろう。

現在、いわゆる現代において、伝統と現代、自国と他国、自民族と他民族の融合、離反、交流、交錯、またとくに自分と他人、自分と自分、などの諸価値観の破壊、複合、多様化のなか、モンゴルの現代詩は、どのようにつくられ、どのように受容されていくは、誰も予想しかねる。しかしもし、あえてボヤンヒシグ氏の異国での孤独と、詩と言葉の世界での探検の心情と、作者がわたし達読者・批評への期待とを、私なりに表現しようとするならば、フランスの哲学者、科学史学者、文学者である、ガストン・バシュラールへ1884（1962）の言葉と、同じフランスの詩人、ギョーム・アポリネルへ1880（191

8）の詩を引用して表させてもらいたい。  
バシュラールは詩的イメージが、日常的、科学的、哲学的な思考とは別の次元にある存在論的なものだと言うことを強調して、次のように論じている。

「……もし詩的想像力によって提出された問題を研究しようとするならば、自分の知識をわすれさり、これまでの自己の哲学研究の習慣をことごとく放棄しなければならぬ。ここでは過去の教養は通用しない。さまざまな思想を統合し、構成するながい努力、週にわたり月にわたる努力も空しい。現在しなければならぬ、詩イメージの生まれ得る瞬間に現在しなければならぬのだ。すなわち、もし詩の哲学が存在するならば、この哲学は、主調詩句をたよりとして、孤立したイメージを完全に没入し、まさにイメージの新鮮さによる恍惚そのもののなかに、生まれ、また再生しなければならぬ。詩的イメージは、靈魂のおもてに突如として浮かぶ浮き彫りであり、低次の心理的因果性からでは正しくきわめられないものである。……」<sup>14</sup>

いうまでもなくこれは、哲学者・科学者が詩をどのように研

究するかについての指摘であるが、しかし、どのように詩を見るべきか、また如何に詩と付き合うべきかについての見解が、ボヤンヒシグ氏の詩への思いと、氏のわたし達読者、批評者への期待とを、見事に捉えていると言えらる。つまり、真の詩はイメージの新鮮さによる恍惚そのものなかに、生まれ、また再生されなければならない。またそれが低次の心理的因果性からでは正しくきわめられないものである。それ故、真の詩とくに現代詩は誰もができる仕業ではない。その詩的想像力の創作においては、前述したように伝統と読者の、両方から厳しいまなざしの監督、ないし非難があり、決してたやすく達成されることではない。そういう真の詩の表現を獲得する困難と、現代詩の創作における先駆的な役割を担わされた辛さを、詩人ギョーム・アポリネルは、その晩年の詩、『美しい赤毛の女』で最も的確に表現できたと思われる。

……  
友よ ぼくらだけで ぼくらのために

伝統と革新のあの長い反目を裁いてみることにする

秩序と冒険の反目

神の口に似せてつくられた口を

秩序そのものである口を持つ諸君

どうぞ寛大であつてもらいたい

完璧な秩序だった人々と

至る所冒険を求めるぼくらを比較するときは

ぼくらは諸君の敵ではない

広大で不思議な領土を君らに提供したいと望んでいる

その領土では 摘みたいと思う誰にでも 花咲く神秘がさし出されている

そこにはかつて見られた色彩のさらに新しい火の数々があり

レアリテをあたえてやらねばならぬ

目方の計れぬ千の幻影がある

ぼくらは善を すなわち一切が沈黙している広大な地方を  
探求したい

追いたてることもひきもどすこともできる時もある

つねに無限と未来の境界で戦っているぼくらを

憐れんでくれたまえ

ぼくらの誤りに憐れみを ぼくらの罪に憐れみを

……  
……  
……  
(15)

確かにボヤンヒシグ氏の詩は、多くのところではまだ探索・模索の段階にいたるとはいえ、険しい言葉の探検の道において実験的な過ちを犯し、今後も伝統的な詩の牙城から厳しい非難を浴びされることは免れないであろう。しかし、もし氏の内的な期待が、アポリネールの詩に内包されているとするならば、わたし達読者・批評者は、もつと謙虚にその詩を傾聴し、慎重にその意味を吟味しなければならぬであろう。現にモンゴル現代詩は、まだこれから成長する時期にあると言え、真の爛熟を迎えるには、これからの読者と共に成長することが必要とされよう。なぜなら、それは、わたし達のここを豊にし、わたし達の生を満たしてくれるからである。

## 六

そして、詩文集『懐情の原型——ナラン（日本）への置き手紙』（前掲書）も世に著されたことは氏の言葉における苦闘の数々が日本の読者にも受け入れられつつあることの現れであろう。かつて内モンゴルでもそれほど理解されなかったこの現代

モンゴルの詩魂が、今度、異国の言語の上、散文をまじえながら日本島に上陸を果たしたとは、いささかはらはしくもない。

しかしその不安もこの間、文学評論家坪内祐三氏の批評を讀んで一蹴された。「母国語でない、素的に素晴らしい日本語に出会うまで」（『文学界』二〇〇〇年六月号<sup>(16)</sup>）には、坪内氏が以下のように評価している。

「：仰天した。（：）あまりにも素晴らしい文章なので。

外国人の書いた日本語としては優れているといった、そういうレベルではない。日本人の、しかも「文学」をなりわいとする私の同世代の人びとを見まわしてみても——ボヤンヒシグは一九六二年生まれつまり私の四歳年下だ——これほど文学的クオリティーの高い文章（日本語）をもつてる人は、どれぐらいいるだろう。（：）ボヤンヒシグはとても気持ちの良い文章の書き手なのだ。（：）突出した才能の持ち主だ。（：）この作品集の素晴らしきの九分の一ぐらいしか紹介することができなかったわけである」

というようにボヤンヒシグ氏の文章を賛嘆した坪内氏は、ボ

ヤンヒシグの、あるいはモンゴル文学の最も深い肝心なところの一箇所を見事に捉えている。つまり、「しかし彼は自己を神話化しない。つまり神話化する視線で自己を眺めない。その自意識は、きわめてナチュラルなのだ。普通なら、そういう自意識の自然さは文学的自我と相い反するものなのに……」と。

しかし、まさにそういった近代の自意識をあまり強く意識せず、才能そのものが大自然の現われだという、あの自然と自然さを自然に流出するように生まれ、そしてそれをごく普通に自然に受け入れ、享受するというモンゴル英雄叙事詩の伝統がここで読み捉えられている。つまり、モンゴル文学の神髄であるジャンガルの精神の現われであろう。かといってそれは決して神・英雄だけを祭る儀式ではない。それはかつて全モンゴル人が参与して、誰もが霊的な存在であると自覚され、自然の前で平等に生を受け、人間自分を霊的に、またちっぽけな生き物として見つめるといような精神的な崇高さとイロニーの現われである。

その自然と人間と言語の間に往復しているポヤンヒシグ氏の日本語で書かれた散文の一節を挙げてみても、そこから溢れ出るほどの詩情とその特徴の一斑が推知できよう。

……

当然、僕は自分のウルガを持たなかった。ウルガとは長い棒とその先にある縄からなる馬取りの道具だが、権力や権力の比喩でもある。それを握るチャンスも逃してしまったのである。馬に手が届かないということだ。そのせいか、僕は今でも実家に帰る時、主人のように堂々と胸を張って歩く勇気が足りない。ある意味で、僕はいつまでも客人なのだ。故郷に遠慮することの悲しさがある。

ウルガの代わりに僕を助けてくれたのは、ペンである。ことばを放牧する仕事とのめぐりあい。ペンが僕の権力や権力を意味するかどうかは断言できないが、原稿用紙の上に自分の遊牧帝国を作ろうと志したことは確か。決して広くない土地だが、一ページごとに開いていくと果てしない豊かな空白。僕の夢を横切つて疾走する馬もいれば、頑固な青い山羊や、永遠に沈黙を保つたままに死ぬ羊や、死んだ仲間のために盛大な葬式を行う牛もいた。月の砂漠を一層際立たせるかのように、ゆっくり姿を現すラクダもいた。オオカミもいた。

ペンで耕す。山地の蕎麦がおいしい。方眼のない原稿用紙に、幼い頃の夢が小さな白い花をいっぱい咲かせる。文

字が熟する時、ことばが実る時、花が散る。

僕は独りぼつちの牧主なのだ。使用人もいらぬ。何もいらぬ。いるのはウルガとモンゴル語という馬だけ。僕のウルガは実に様々なペンであった。鉛筆（馬を走らせたままに描いて、消しゴムで消したこともよくあった）、毛筆、万年筆、ボールペン。14KのMONT BLANCも持っている。

詩、エッセー、ラブレター、履歴書、伝言、主人公のない小説、何でも書いて見た。冬はやせていくことばたち。ペンがふるえる。僕の手も終始それを握ったままにふるえる。権利や権力もふるえた。何にもない方向を凝視する視線もふるえた。

悲しい春もある。疲れ切ったことばたちが死んでいく。にぎやかな短い夏もある。天高く馬が肥える秋もある。白くて寒い月が、星が茂るほうへ移動していく。僕なのだ。ウルガの影が落ちたところに文字がビッシリ生えていく。そこに蛇も隠れている。石もうるおっている。

僕はこの頃よく馬の夢を見る。死んだ父がいつも愛馬の水黒で、よく日本にいる僕の小さな夢の中にやってくる。ウルガは弟に譲っていた。

僕の馬は水黒より結構痩せているし、僕のペンもいつも渴いている。僕は第二の詩集「天の風」を父にささげた。不肖の息子が、それを自分の家畜と思っているのだ。<sup>(17)</sup>

……  
いづどこへ行つて、何語でしゃべっても、僕には日本語という予備の馬がいる。日本語の経験はつづく。僕はいつも「只今、放牧中」だ。<sup>(18)</sup>

長い引用になつてしまつたが、氏の多くの詩がまだ訳されていない現在、彼の世界を理解するには、日本語で書かれたこの一節を掲載しても物足りないような気がしなくもない。上記の散文からでも伺えるであろうが、その区切りのよい短いセンテンスを駆使して、氏はわずかな言葉や行間に、複数の意味合いを含ませ、その意味合いをお互いに撞着させ、交錯させ、そして語り手である氏はその上に諧謔的・自己パロディ的・または自己言及的な立場から見事に周囲を、ユーモアを交えながら嘲笑して、そして決して自分の文章の一つの目論見に陥らせないような周到さを用意しているのである。そういった逍遙する語り手の、文化や自他に対する批評的・詩的な散文は、安易に解釈・理解され難かるうが、しかしそこには決して小細工、

職人のような技巧に走りすぎた傾向がない。また詩文からでもわかるように、そこには純朴なノスタルジアや素朴な自己愛に浸っている作者が見られず、逆に、その行間からわたし達は、彼の何回も自分の価値観・アイデンティティ・言葉をひっくり返したあげく、言語、他国の言語、詩の言語というように複数の言語の間を苦しんで、また楽しんで考え尽くしてきた経緯と痕跡が垣間見られよう。

ボヤンヒシグ氏は、過去の彼と同じように一貫して、真の言語の世界、言語の力、言語の神秘さを呈示しようと努めてきた。しかも彼は母国語や他国語というよりも、むしろ言葉・詩そのものの内部において多く冒険的な越境をし、孤独な探検してきたと言える。そういう孤独を耐え、忍耐強く努力によって実った果実がこのたび多くの支持者によって、日本語を媒体に、日本の読者に進呈した。それがきっかけで彼の言葉における探検の道程に、より多くの理解者がふえてくることを願いたい(実際、この原稿の初校の段階、はやくも「朝日新聞」二〇〇〇年五月二一日付、日曜全国版に『懐情の原形——ナラン(日本)への置き手紙』の書評が掲載された。「犀利な観察眼が柔らかな精神にくるまれ巧まざるユーモアを醸し出す。まるで口を切ったばかりの吟醸酒だ。この小さな本を読み終えるのが惜しい気

がした」という河谷史夫氏の言葉を惜しまない絶賛は、ボヤンヒシグ氏の越境文学を認め、理解者が増えてきたことの証左になろう。ところで、これはモンゴル文学史において有史以来、未曾有の一頁を書き込んだことは間違いない。

## 注

(1) この小論の大部分はすでに批評的な立場から『天の風』(北京民族出版社、二〇〇〇年一月)の「解説・序」として同書にモンゴル語で掲載されたが、今回日本語で掲載するにあたって日本の読者を考慮して大幅な書き直しを施した。

(2) B・ボヤンヒシグ、モンゴル・オンゴド部族の血を引き、一九六二年十月一日中国内モンゴル自治区ウランハダ市アルホルチン旗生まれ。一九八五年七月内モンゴル大学モンゴル言語文学部卒、文学士。卒業後北京中央民族出版社で編集として勤め、一九九二年七月八日渡日留学、一九九四年法政大学大学院日本文学専攻入学、一九九八年日本文学修士学位取得。一九九九年三月同大学博士課程前期終了。

ボヤンヒシグ氏の主な著作にモンゴル語で書かれた詩集『片方の月』(内蒙古人民出版社、一九九一年)、『天の風』(前掲書)がある。共著に中国語で訳された詩集『遙かなる星の光——現代モンゴル詩選——』(席慕蓉編、台湾圓神出版社、一九九〇年七月)、

- 『高原の星辰』(李松波等編、雲南省徳宏民族出版社、一九九二年五月)がある。また日本語で書かれた詩文集『懐情の原型——ナラン(日本)への置き手紙』(英治出版、二〇〇〇年四月十日)、日本の文芸・詩誌『詩学』、『地球』などに日本語で書かれた詩数十篇あり、そのほかモンゴル語の詩文多数ある。
- (3) 席慕蓉編『遙かなる星の光——現代モンゴル詩選——』、台湾圓神出版社、一九九〇年七月(一二頁)。
- (4) 王紅彬「解説」李松波等編『高原の星辰』雲南省徳宏民族出版社、一九九二年五月(二〇六頁)。
- (5) 『毎日新聞』(全国版)二〇〇〇年五月四日。
- (6) 『読売新聞』朝刊、二〇〇〇年三月十日。『朝日新聞』朝刊、二〇〇〇年四月十五日。
- (7) 右同紙。
- (8) 遊牧主義: Nomadisme, Nomadism。シル・ドゥルーズの用語。例えば「遊牧生活」(『千のプラトール』河出書房新社、一九九四年(四三六頁、五四九〜五五六頁)と訳されることがあるが、ボヤンヒング氏とその作品、及び私自身を含め、多くの異文化間を生きる人々の、言語・文化の間を移動する性格と文化的な主張を考慮すれば、Nomadism の英語における意味の拡張性から考え、それを「遊牧主義」と訳して理解した方がより適切であろう。
- (9) 詩集『天の風』に六十二編の詩が収録されている。それらをモンゴル語から日本語へ訳す作業は至難の業であり、筆者はこの度割愛するしかなく、他日の機会を待つことに読者の了解を求めたい。
- (10) 前掲書『天の風』、「天の風」(十九〜二〇頁)。
- (11) 「ジャンガル」…十三〜十五世紀か、さらに十三世紀以前から伝えられ、モンゴルほとんどの地域に広がっていた英雄叙事詩。現約六〇部、十万行以上収録されており、内容は大まか友情物、婚姻愛情物、戦争物と三つに分類され、最も多くの戦争物である。物語の歴史的な出来事、人物などはすべてフィクションであり、モンゴルの民謡、民間物語、祝詞、賛美歌などが含まれ、強いリズム感のある韻を踏んだ口承文学である。「ジャンガル」という語源は、ペルシャ語で「世界征服者」、突厥語で「戦勝者」、モンゴル語で「力者」というように解釈によって様々である。「ジャンガル」は、最初十九世紀初期(1804〜1805)一部分がドイツ語で訳されてヨーロッパに紹介されたことがきっかけで、ロシアにおいてもほぼ同じ時期に収集され、出版されたのである。以来ドイツ語、ロシア語、モンゴル語(モンゴル文字・トド・モンゴル文字・キリル・モンゴル文字)中国語で出版され、研究されている(参照:『中国大百科全書』「中国文学I」、中国大百科全書出版社、二九九〜三十二頁。また若松寛訳『ジャンガル——モンゴル英雄叙事詩2——』東洋文庫五九一、平凡社、一九九五年)。
- (12) 「英雄叙事詩」について、プラトンによるソクラテスとイオンとの対話についての記録「イオン」(『プラトン全集VI六』角川書店、一九七四年へ一〇三〜一三二頁)で言及されているが、以下の引用からも英雄叙事詩の性格がうかがえよう。
- 「……ミューズの女神もまた、人々を自らの手で入神状態にし



て、この入神状態になった者たちの手を経て靈感を吹き込まれた他の人たちの鎖ができあがる。というのは、叙事詩のすぐれた詩人たちはすべて、技術によってではなく、入神状態にあって、神に憑かれて、そのすべての美しい詩を語っているのであつて、そしてまた、すぐれた抒情詩人たちも同様である」(前掲書 一一四頁)。

- (13) サイチンガ。内モンゴル、チャハル部族出身、一九三七年から一九四一年まで日本東洋大学で留学し、教育学を学ぶ。中国文学における魯迅と同じく、啓蒙的な役割を果たし、内モンゴル現代文学の基礎を定め、現代文学の先駆者、詩人である(『ナ・サインチョクト全集』全八巻、内モンゴル人民出版社、一九九九年八月)。
- (14) 岩村行雄訳、ガストン・バシユラール著『空間の詩学』思潮社、一九六九年一月(十二頁)。
- (15) 堀口大学・窪田般彌・飯島耕一・入沢康夫訳『アポリネール全集』I、青土社、一九七九年六月。
- (16) 坪内祐三著『母国語でない、素的に素晴らしい日本語に出会うまで』、『文学界』二〇〇〇年六月号(二九〇〜二九五頁)。
- (17) 前掲書『懐情の原型——ナラン(日本)への置き手紙』(二十一〜一十三頁)。
- (18) 右同書(一一四頁)。「馬」はモンゴル語で「モリ」といい、モンゴル人にとって、決して日常的な運搬・労働の道具だけを意味するのではない。それは「ヒー・モリ」(天神の使者)、「フルグ」(天神の使者)、「アハタ」(駿馬)などの言葉と類義語をなし、「運命や霊

的なもの」に関係する霊的な動物や使者を指す場合が多く、また親友、恋人、夢などと同じような親しい特別な存在として用いられる場合もある。